



樹里安だより

ジュリアン

2005年 3 月
Vol.17



— 安行の名所 (その四) —

埼玉県花と緑の振興センター 《川口市安行1015》

昭和28年「植物見本園」として開園。埼玉県の施設で安行で愛され続けている。植物に関する実験室や病害虫・土壌などの研究施設と、約5,000本2,000種の樹木のある展示園がある。展示園は四季折々の花や緑を自由に見学できる。2月の梅園は見事の一言。平成15年には「植物振興センター」から、現在の「花と緑の振興センター」に名称を変更。

川口神社の

スズカケノキ

(川口市金山町6-15)

JR川口駅の東口から川口神社を目指して歩いていく。この地域はかつて鋳物工場が最も多い地域であった。現在は、住宅地が多くなっているが、歩いていると今もなお残る鋳物工場から出るコークスのにおいがする。昔ながらのおせんべい屋さんなどがあり、昭和のレトロな雰囲気が今も漂っている。川口神社はその街の中にポンとある。この神社は、川口市民の方々には毎年12月15日に催される大歳祭（おかめ市）で知られているのではないかな。ゆっくりと1周すると緑に囲まれた神社だということがわかった。

周囲の雑踏とは無縁の都会の森である。立派な山門は由緒正しい神社の証明かもしれない。境内は何か崇高な感じで自然と身が引き締まる。お年寄りや家族連れが散歩をしていて、地元の憩いの場となっているようだ。常緑樹が多いため冬なのに森は青々としている。

その中で今回の主役スズカケノキは真冬の弱い日差しを受けていた。数少ない落葉樹なので目立ってる。葉はすっかり落ちていたが、厳寒の季節にじっと春を待つ姿はどこかほかなげだ。このスズカケノキには筆者はいささか思い出がある。実家の目の前の植木畑にあってよく木登りを楽しんだ。独特な幹肌、大きな葉っぱ、木登りをした後の手のにおいが懐かしく思い出される。この木の仲間のアメリカスズカケノキは東京都の街路樹などでよく見かける。又、新葉の葉裏には細毛が多いことから、風が吹くと子供の気管支などに吸い込まれやすいので学校に植えることが避けられている。

5月になれば若葉色で境内が彩られるのであろう。五月晴れの空の下、再度この神社に訪れるのが楽しみだ。



スズカケノキ

Platanus orientalis L. (スズカケノキ科スズカケノキ属)

- 分布：西アジア 南欧 北欧原産
- 高さ：20～30m 幹周り3m～9mになる落葉広葉高木
- 用途：公園樹 街路樹 緑陰樹 景観樹 独立樹 並木
- 陽樹
- 4月～5月に開花 生長は速い。萌芽力は大。刈り込みができる。移植は容易。煙害に強い。潮風で葉先が赤褐色になる。水湿地、肥沃土を好む。土地を選ばない。
- 直幹 樹皮は大きくはがれ、淡緑白色のまだらになる。



鈴掛のホ

川口神社の保存樹木

樹種	科名	指定年月日	指定番号	所在	幹周	樹高
スズカケノキ	スズカケノキ科	H12.9.1	16	金山町6-15	2.3m	16.0m

金叶含笑（金葉木蓮）

黄金の葉を持つ木蓮。木蓮というと春先に白や紫の大きな花を咲かせる華やかなイメージがあります。しかし濃い緑の葉は地味で印象のある方はあまりいないかもしれません。今回紹介する金叶含笑は木蓮の一種で葉（新葉）が金色をしています。まるで葉に金箔を塗ったようです。陽光が当たった煌びやかな姿は初秋のお庭を上品な雰囲気 にします。この木蓮は中国原産で安行の植木業者が最近日本に導入したものです。日本でも十分栽培できますが本格的な商品化はこれからです。



金叶含笑（金葉木蓮） モクレン科

- 学 名：Michelia foveolata Merr.ex.Dandy.J.Bot
- 原産地：中国湖北西部 湖南南部など
- 樹 高：最大で30mになる（中国の山奥など）
- 花 期：3～5月 花は淡黄色で良い香りがする
- 果熟期：9～10月
- 常緑高木
- 特 徴：葉は新葉が金色で後に緑色になる

日本では浜名湖花博で初めて紹介された。第59回秋の安行植木まつり（H16.10/9～11）で埼玉県では初公開。

資料提供：（社）日本植木協会青年部埼玉県支部



記念樹にふさわしい木とそのいわれ（その4）

入学や入社の記念

サクラ バラ科 サクラ属 （落葉広葉樹・高木・陽樹）



わが国の新年度は4月に始まるので、その時期に咲く桜の意味合いはあまりにも深く、入学式や入社式を飾るのに最もふさわしい。日本を代表する花、そして花の中の花。サクラは日本人の心に無条件にめでたさをかもしだす。そして、青葉、紅葉も美しく、記念樹としても存在感の高い樹木といえる。入学や入社など、新たなスタートに前途を祝して。

1. 特徴：開花期3～5月、結実期6～7月。ソメイヨシノ、ヤマザクラ、オオシマザクラ、サトザクラなどの品種がよく植えられる。

2. 植えるときの注意：時期 11～12月・2～3月
場所 水はけのよい日当たりで、適湿の所がよい。

3. 管理のポイント：てんぐ巣病などの病害や、ケムシ類の虫害が多いので、発生したら初期に防除する事が大切。

《他の木》



マンサク

落葉広葉樹
小高木・陽樹



アベリア

半落葉広葉樹
低木・陽樹



イチョウ

落葉樹／高木
陽樹・雌雄異株



アスナロ

常緑針葉樹
高木・陰樹

参考：（財）日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



植物の文化（その4）

植物と染色（草木染め）

現 代人の服装は様々でファッショナブルに富んでいます。街を歩くと明るい色から渋みのある色までまるで絵の具をすべてパレットに出したような色合いです。現在の衣服などに利用されているのはほとんどが化学的に作られた合成染料が使用されています。しかし昔は合成染料などはなかったので植物が使用されていました。

草木染めの歴史は古く、中国では紀元前3000年頃植物による染色技術が確立されていたといわれています。紀元前2500年頃にはエジプトやインドでも様々な植物を利用し、染色が行われました。

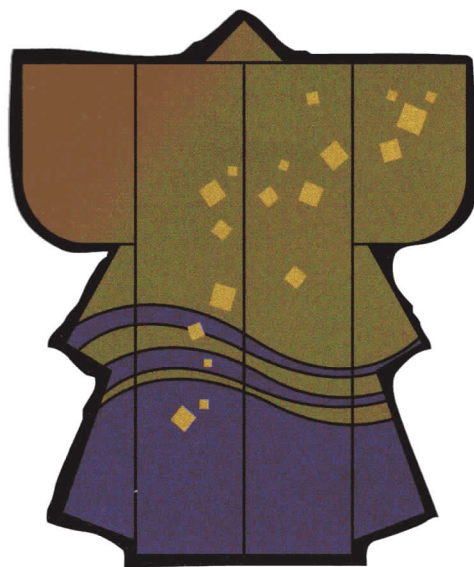
日 本では弥生時代から始まったと伝えられ、「魏志倭人伝」にも記録されています。古墳からも多く出土され、草や根、木の皮、花・実などを利用したものでした。飛鳥時代は染め色の技術が向上した時代で大陸や朝鮮半島の影響を強く受けた時代で冠位性が敷かれ服の色も位づけられるようになりました。また、代表的な染料植物である藍が、中国から渡来しました。藍は古来は薬用として利用され防虫・防腐効果があることから、染料用として関西地方で栽培されました。

奈良時代の文化遺産を見ると染色技術が完成した時代といっても過言ではないようです。原色のようなはっきりとした色彩を追い求めた時代といえます。

平安時代は遣唐使の廃止などで国風文化が栄えた時代でしたが、染色も同様に唐様を脱した時代でした。日本の独自色の原点です。

鎌 倉、室町を経て江戸時代になると佗や寂びなどの影響で渋い色相がもてはやされる時代になってきました。藍が木綿とともに実用化されたことも一因です。江戸中期から徳島藩で藍を栽培奨励したために阿波特産となり、代表的な商品作物になりました。紅花・麻とともに三草と呼ばれました。藍染めはその色合いや、風合いが愛され庶民の色として定着していきまいた。

明治時代に入ると合成染料が発明され、ほとんどの染色が合成染料に移り変わり現代にいたります。合成染料は簡単に、早く、安く、大量に生産できることで生産者に利点が多いことから多く利用され、それと反比例して世界中の伝統的な染色技術は軽視され、すたれていきました。しかし、いくら良質の染料が登場しても自然の色合いを出すことはできません。現在、草木染めはわずかしかなのですが、古き良き時代を思い出し、伝統技術を見直していく必要があるのかもしれないのだから…。



藍

Polygonum tinctorium タデ科タデ属

原産地：インドシナ南部

一年草で50～80cmになる

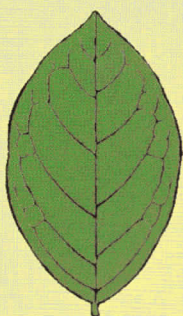
花 期：9月に白や紅色の小花をつける。

- 藍色の染料をとる植物には、リュウキュウアイ(キツネノマゴ科) インドキアイ(マメ科)もあり特に藍を区別しタデアイとも呼ぶ。
- 日本には飛鳥時代に中国から渡来
- 江戸時代には紅花・麻とともに三草の一つに数えられた。
- 漢方薬として葉・実を利用 生葉の汁を毒虫の刺傷や腫毒に外用した

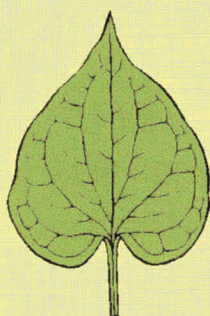


葉形
単葉

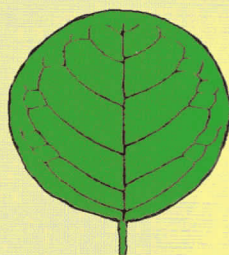
葉身1つで1枚の葉を構成している葉でもっとも多く見られる形態です。



卵形葉



心形葉



円形葉



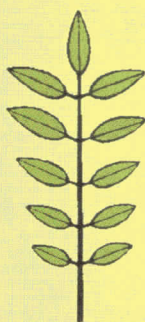
倒披針形葉



線形葉

葉形
複葉

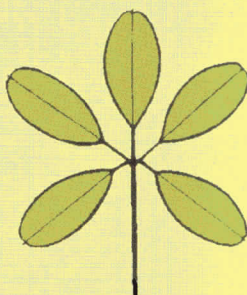
葉の形態の一つで、小さな葉（小葉）が複数集まって1枚の葉を構成する葉のことです。羽状複葉、掌状複葉、3出複葉などが含まれます。



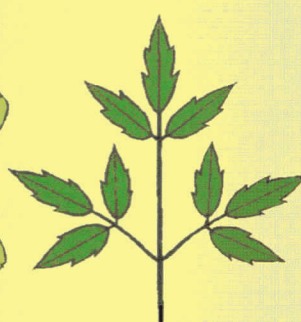
奇数羽状複葉



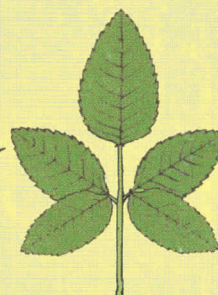
2回羽状複葉



掌状複葉



2回3出複葉



鳥足状複葉



川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成17年3月1日

発行：財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

TEL 048-296-4021

ホームページ：http://www.sainet.or.jp/~jurian/